

宇宙からのお客さん

いつもと変わらないありふれた日の夜のことだった。何も起こらない日で終わるはずだった。まさかあんなことが起こるとは。

ツキ。これが僕の名前だ。そんな僕はいつものようにパソコンに向かって大学の課題である退屈なレポートを書いていた。

「なんでレポートなんてしないといけないんだ？勉強に一体何の意味がある？」

そう文句をブツブツ垂れながらも単位欲しさにパソコンと睨めっこする僕だったが、いい加減集中力の限界だった。諦めてベッドに寝転がりスマホを触り始め、SNSを見始めた。

そこはいつもと変わらないインターネット空間だった。僕は変な人の変な理論や面白おかしい動画や写真を何も考えることなく見続けた。

小一時間経った頃、事件は起こった。

「え？充電？え？」

スマホの電源が突然切れたのだ。記憶が正しければ充電はまだあったはずだが、大人しくレポートしろと言うことだろうか。それに続けて気分の悪いため息をつきながら、

「仕方ない。レポートするか」

と起き上がって机に向かった。パソコンと再び睨めっこをしようとした時だった。

さっきと同じように突然パソコンの電源が切れたのだ。

「はえ？！」

その一言を文章に翻訳すると、

「充電はまだあったはず！それにさっきのレポートはまだ保存してなかった！どうする？！」と行き場のない怒りを自分ではない誰かにぶつけようと必死になっていたのだ。僕の顔しか浮かばなかったけど。

無駄だと分かっているが急いで充電コードを繋ぎ、電源ボタンを心臓マッサージするかのように連打した。

しかしパソコンからの反応は無く、ポチポチと電源ボタンを押す音が部屋に響いていた。

「はあ…」

さっきの勢いのある「はえ？！」とは真反対のトーンだ。単位が取れないかもしれ

ないという絶望と不安、そして諦めの混ざった最上級の落胆だ。

僕が俯いているとパソコンの画面が勝手についた。

真っ白な画面に謎の文面が永遠と書き連ねられていた。それと同時にそれを読み上げるかのような機械音も入っていた。おそらくどこかの国の言語だろうと確信した僕は、

「まさかハッキング?!」

と直感したので電源を切ろうとした。が、一向に切れる気配がない。

「頼むからバグか何かであって欲しい」という願いが心のどこからかじわじわと溢れてきた。

パソコンから出る謎の機械音は次第に大きくなり、いよいよパソコンの出せる最大音量に到達した。

我慢できなくなり耳を塞ぐと家の天井の方から衝突音がした。僕は慌てて身をかがめた。

瓦礫がいくつか落ちてきたが、一切怪我をしなかったのは幸いだった。身の安全を確認して、天井を見るとそこには軽自動車くらいの大きさの宇宙船のような物が顔を覗かせていた。

そしてそれ以上に僕を驚かせるものがそこにあった。

「人? いや、宇宙、人?」

宇宙船の窓から人影が見えたのだ。グッタリとしており意識はなさそうだ。

「お客…さん?」

僕は宇宙船から宇宙人なるものを運び出した。人間と区別がつかないくらい人間にそっくりで身長と体重、年齢は僕と同じくらいといったところだろうか。特におかしなところはなく、難なく持ち運べた。

とりあえず宇宙人を自分の部屋のベッドに寝かせ、彼が起きるまで椅子に座って待つことにした。

「…」

ベッドで横たわっている宇宙人を横目に様々な考えを巡らせた。

宇宙からの未知の病原菌を持っていないか、友好的なのか敵対的なのか、ここで面倒を見るべきなのか、それとも警察に、など思考を巡らせているうちに宇宙人が目を覚ました!

「う〜ん。おい? そこの兄さん?」

「?」

今誰が喋った？もしかして、この宇宙人？

「君が喋ったの？」

「そう」

彼は上体を起こし、こちらに体を向けて座った。

「…」

「どうした？宇宙人でも見たような顔をしているぜ？」

「…僕は、少し疲れているらしい。ちょっとお茶飲んでくるよ」

「そうだ！そいつだ！せっかくだしお茶でもして親睦を深めようぜ！」

「お茶だって？初対面だよ？！てか、宇宙人にもそんな文化があるの？」

「ある。俺はビスケットが好きでな。無ければ何でもいい。なんかあるか？」

「近くのスーパーで買ったものなら。それでいい？」

「もちろん。あ、紅茶も頼む。ホットでな」

「！…」

僕は彼の傲慢な態度に少し苛つきながらも大人しく部屋にあったビスケットの箱を開け、彼の前に置き、

「ちょっと待ってて。紅茶を淹れてくる」

と言って部屋を離れた。

僕が部屋に戻ってきて紅茶を宇宙人の前に置くと、彼は鼻を鳴らしながら

「おお、これはいい紅茶だ。俺の好みだ。でもまずはビスケットからいただくぜ」

とか言いながらバリバリとビスケットを食べ始めた。

僕たちはビスケットを食べながら色々な話をした。お互い自己紹介をして、彼はどの星から来て、その星はどんな星なのか。僕の方は何が好きで普段何をしているのかなどを話した。彼と話したことをまとめると

- ・先のパソコンの謎現象は彼のせいであること。
- ・彼は僕たちの隣にある銀河であるアンドロメダ銀河から来たこと。
- ・有給休暇を取り、一人旅の途中でこの星に来たこと。ちなみに彼は普通の会社員。

- ・名前が無いので名前を考え、「ユウ(友)」と名付けたこと。気に入ってくれた。

お互い自己紹介を済ませ色々な世間話をして、あらかた話題が尽きてきた頃、そろそろ宇宙船について質問したくなった。彼は何故この星に墮ちてきたのか。何が原因で墮落したのか。

「そうだ。ユウはなんでここに墮ちてきたの？宇宙船の故障？」

ユウは咀嚼していたビスケットを飲み込むのに苦労していたらしく、ちょっと待てと言わんばかりに手を前に出した。そして飲み込み、口を開いた。

「ただのよそ見運転だ。綺麗な彗星があつてだな。気絶したのは予想外だったが」

「ふう〜ん」

思ったよりことは重大ではないらしく拍子抜けした。そしてそのまま会話が終了し、それを申し訳なく思ったのかユウが

「そんな話はいい。そうだ、茶を淹れてくれた札に宇宙にドライブに連れて行ってやるよ！」

と言ってきた。

「宇宙にドライブ?!」

「そうさ。行きたいか？」

僕は一瞬の間に恐怖と期待が入り混じった感情を整理し、

「行く!連れてって！」

威勢よくそう答えた。実際は期待より恐怖の方が勝っていたが、宇宙にドライブなんて人生で二度とない経験だ。だから僕はそう答えた。

「よし、そうと決まれば早速行こう。宇宙船は大丈夫なはずだ」

僕たちは壊れた天井に登り、早速宇宙船に乗り込んだ。

宇宙船がだんだんと高度を上げ、地上がだんだん小さくなってきた。乗ってすぐの時は僕が昔修学旅行の時に乗った飛行機の景色と大しては変わらなかった。だがやがて見たことのない景色になってきた。そう、地球が丸ごと見えたのだ。

「写真では何度も見たことあるけど、本当に青く見えるんだね」

「そうさ。こんな美しい惑星をなぜ人は壊し続けるのだろうかといつも思う」

ユウは操縦桿を握り、前を見ながら淡々と語った。

「ユウの星もこんな感じなの？」

「そうだな。でも俺の星の方が少し淡い色をしているな」

「そうなんだ」

「ああ」

特に話題が膨らむこともなく会話が終わった。単純に外の景色に集中したかったのもあるし、緊張していたのもある。なんと言っても宇宙をドライブなんていう経験は初めてだったから。

エンジン音だけが宇宙船の中に響いていて、地球がだんだん小さく遠くなっていくのを僕はじっと眺めていた。この光景を心に焼き付けておこうと思うと同時にこの数十分間に起きたことの整理をしているうちにいつの間にか眠ってしまっていた。

「ツキ、ほら起きろ。俺は腰が痛い。外に出て少し観光でもしよう」

目を覚ますと宇宙船は止まっていた。重力も感じたからどこかの惑星に降りたのだと分かった。外は明るく景色がうっすらと見えるが、まだ目がしょぼしょぼしていてハッキリとは見えない。しかしユウが隣でゴソゴソ動いているのはハッキリと分かった。

「ほら、降りた降りた」

僕はまだ眠い目を擦りながら宇宙船を降りた。外の空気に触れるとだんだん目が慣れてきて視界がハッキリしてきた。

駐車場らしい。僕たちが乗ってきたのと同じような宇宙船がちらほら停まっている。

「ほら、こっちだ。いい観光地が近くにあるんだ。ここからはバスだ」

バス停に向かい、バスを待っている間どこに行くのかを聞いた。

「着いてからのお楽しみだ」

「もったいぶらないでよ」

「これは知った状態で見ると感動が薄れるからダメだ」

「え～」

「ダメなものはダメだ。ほらバスが来た」

僕は渋々バスに乗り込んだ。面白かったのは地球のバスと違ってタイヤがないところだ。宙にフワフワと浮かんでいる。他は特に地球のバスと変わらない。座席の近くには「とまります」のボタンもある。

バスが動き始め、その観光地とやらに向かった。世界遺産的なものがあるのだろうか。いや宇宙規模だから宇宙遺産？とか思いながら僕は車窓を楽しんでいた。

道中、そこは本や映画でしか見たことのないような世界が広がっていた。

地上はどこまで行っても平らで、山一つとなかったが、緑豊かで自然と融合した建物があり、空高く柱が伸びているのが見えた。柱を辿り、空を見ると二つの太陽と巨大な惑星が浮かんでいるのが見えた。

十五分ほど経ただろうか？ユウが、

「ほら、そろそろ着くぞ」

と言って彼は「とまります」ボタンを押し、僕たちは降りる準備をした。

着いた場所は草原だった。暖かく心地よい風が吹いている。近くには小川があるら

しく、どこからかせせらぎの音もする。

「ここは？」

「ここは知識の草原。この宇宙でも屈指の観光地だ」

「知識の草原？」

「そう。ここには毎日数えきれないほどの星が降ってくる。そしてその星々には全宇宙の知識が詰まっている。星が何処から来るかは俺も知らん」

「つまりどういうこと？」

「命が生まれる理由はまさしくこれだ。宇宙に記録された知識を持って生まれ、それを人類に広め、進化させる。その進化とは魂の成長だ。無論、俺とは違う意見を持つ人もいる」

「じゃあ、ユウの意見が正しいとすると皆が皆生まれる前にここに降ってきた星を持って行って生まれるのか」

「そうだ。だが知識だけだと物理的なものは動かせない。だから命という入れ物と肉体という器を使う」

僕はとても信じられなかった。何故なら、

「でも生まれたその瞬間に忘れてしまうんでしょ？ここから星を持ってきたことを」

単純な疑問だった。ここでどんなに凄い知識をここで得ようとも生まれてしまえば記憶はパーだ。少なくとも僕は生まれる前の記憶なんて覚えちゃいない。

「ツキの言う通りだ。でもそれはハッキリ言って問題ではない。人は正しく生きていれば、そのうち本当の自分になる。そしてその時、人はここでの知識の力を発揮する。ただそれが難しいと感じるだけだ」

「よく分からないけど、だったらどうすれば本当の自分になれるの？正しい生き方で何なの？」

ユウは待ってましたと言わんばかりの笑みを浮かべ、答えた。

「好奇心に従うこと。苦しい、辛いことを無理にはしないことだな。これは嫌なことから逃げるとは違う。ただひたすら自分と向き合い、他者の戯言に耳を貸さない。他の誰かは誰かでしかない。他人の意見を変えることは自分の力でできる範疇を超えているからな」

「…」

何も言えなかった。彼の言っていることが難しかったのもあるが、言いたいことが沢山あって頭の中で整理できなかったからだ。アワアワと口を動かしてやっとの思いで出た返事は

「言っていることは分かったけど、どうして教えてくれたの？数ある星からここに連れてきたのも」

「今の自分に疑問を持っていただろ？勉強とか色々なことに」

「うん」

ユウはこれ以上ないほど面倒臭そうにため息をつき、

「まず前提として勉強は退屈なものだ。こんなことをして意味があるのかと悩むものだ。俺だってそんな経験がある」

「じゃあ、なんで勉強をする必要があるの？」

「またもや単純な疑問だ。」

「勉強ってというのは訓練して、その心の奥底に溜まった経験に意味がある。地球にもそんなことを言っていた偉人がいたはずだ」

「じゃあどうしたらいいの？このまま無意味な勉強を続けろってこと？」

「…」

ユウは遠くを眺めたまま答えてくれなかった。彼が次に発した言葉は、

「俺が言えるのはこれくらいだ。これは自分で経験し、理解する必要があるんだ。そろそろ地球に戻ろう。ツキも明日大学があるだろう」

気のせいかもしれないが、ユウの声が若干寂しそうに聞こえた気がする。でも僕はそれには触れずに、

「うん」

そう答えた。

それにユウはこの会話を続ける気がなさそうだ。僕はそれを察して、それ以上問いかけることはなく黙ってバス停に向かった。だがバスを待っている間、ユウが何かを話し始めた。

「さっき言ったこと、理解できなくてもいい。いつか理解できる。そしてそれはその時役に立つ。だから忘れるな」

「うん、分かった」

簡単に返事をした。きっとそれ以上話しても僕には理解できないと心のどこかでそう感じていたのかもしれない。

バスが来た。乗り込んでユウの宇宙船があるところまで戻り、地球に戻った。

気づけば僕は家の庭にいた。どうやら宇宙船に乗った後すぐ寝てしまっていたらしい。この時嬉しかったのは、今度は天井ではなくきちんと庭に宇宙船が停められていたことだ。でも僕は別れの時間がもうそこまで来ていると思った瞬間、寂しい気持ちになった。僕が宇宙船を降りて、部屋に入ろうとすると、彼も降りてきた。

「どうしたの？」

「これをツキに渡すのを忘れていた。お守りだ。俺がこの宇宙に存在する証だ」

そう言って白く光り輝く小石を僕に渡してきた。それはまるで銀河がこの中に入っ

ているような、神々しく美しい光だった。そして、その光がさっきまでの寂しい気持ちを吸い取ってくれたような気がした。

「今日のことを忘れるなってこと？」

「そう。分かっているじゃねえか！安心したぜ！それと心配するな。天井は俺の仲間がドライブに行っている間に直してくれた」

「ほんと？」

パッと天井を見ると綺麗さっぱり元通りになっていた。一片の瓦礫もない。宇宙船が衝突してきたことが嘘のようだ。

「じゃ、俺は行くぜ！」

「うん！今日のこと絶対忘れない！」

ユウはにっこりしながら宇宙船に乗り込み彼の姿が宇宙船の中から見えた時、彼が窓を開けて言ってきた。

「紅茶も良かったが次はホットコーヒーで頼む！インスタントじゃないやつだ！ビスケットはあれでいい！じゃ！」

そう言うとエンジンがかかり、音がだんだんと大きくなった。そして宙に浮かんだと思うと、もうそこには宇宙船はなかった。もちろんユウの姿も。

辺りが静寂で満たされた瞬間、さっきまでの出来事が全て夢だったんじゃないかと思った。あの宇宙人、ユウは僕の頭の中にしか存在しない人物で、この宇宙のどこにもいない人ではないかとさえ思った。

でもすぐに夢じゃないと分かった。何故なら僕的手中にはユウから貰ったお守りが静かに光を放ちながら鎮座していたからだ。

そして何より部屋の机にはユウと僕の飲んだティーカップとビスケットがそのまま残っていた。

僕は少し、ほんの少しだけ頑張っ生きてようと思ってお守りを握りしめた。

「また会えるといいな。ちょっと高めのコーヒーとビスケットを買っておこう」

思わず声が漏れた。

僕は翌日、コーヒー豆とビスケットを買った。そして僕はコーヒー豆とビスケットを一年おきに買い直し、その習慣は一五年後まで続いたのはまた別の話だ。